黄昏からの眺め　その四

みずき　啓

木の芽時　心の肌がぞわぞわと泡立つ。毎年、毎年のことだ。痛みを伴う歯の不調で、軟らかい食事も進まぬ夫を励ましはげまし、心の置き所を探しあぐねたひと春だった。

四月、公民館の一室での句会の最中、いきなりドアが開き、黄色いスポーツシャツの男が出現。前置き抜きに車のナンバー四桁を高唱、持主を探していると言う。そのナンバーは私の車にいやに似ていて、予感が走った。彼が再度現れ、再唱したのは私の車のナンバーだった。駐車場の私の車にぶつけたと言う。

「警察にしなきゃだめだからねっ」の合唱を背中に部屋を出た。頭は俳句でぼんやりしたまま。この公民館の駐車場は余裕があり、他の車との接触は考え難いが。ざっと車を見たところ、バンパーは下へずれて、少し開いているけれど、疵二つは大したことないな、と判断した。

「免許証を見せてください」

「いや　ぶつけたのは　あの車（対面に駐車してある薔薇色の車）の人で、私は当事者じゃないんですよ。本人の具合が悪くなっちゃって、私は代理人です」

彼は書き付けを差し出し

「これが私です」紙面には、当事者の住所氏名、電話番号、車のナンバー。そして、彼の指の先には、代理人として彼の住所氏名、電話番号。

「とにかく、当事者の免許証をお願いします」

「それが　持っていないんですよ。財布を忘れて」

（忘れた財布に免許証が在りやなしや？）

「警察呼びますから」

「待って、待って。本人はトイレで吐き続けで出てこれないんですよ。無免許運転だから、保険も使えないって。何とかして貰えませんか。ちゃんとこうして申告しているんですから。そこを考慮して頂いて」

公民館のロビーに戻る。彼等はこの公民館を中心に活動している、デジタルフォトのサークルだった。他のメンバー三人もぼんやりベンチに固まっている。夫に電話した。

「警察にした方がいいんじゃないかな」
夫の声を聞いて安心したのか、むくむくと私の（いい加減虫）が尻を膨らます。
「とにかく、お好きな所で見積りを取って、私の方に知らせてください。私が責任を持って修理しますから」
（大した疵でもないし、逃げられてもいいかぁ）
（前に、耕運機にちょこっと擦られた時は七万近かったから、今回も似たようなもの）
帰りがけに、車検を頼んでいる修理工場に寄ることにした。そして彼のパソコンに見積りを直接送って貰うことにすると、彼はすらすらメールアドレスを書き足した。
私なら（私のメールアドレスは？）あたふた手帳をめくるところだけど。
これきりになってしまう可能性も有り、保証金として、三万円を要求した。
一万円しか出てこなかった。

警察沙汰をやめたとたん、私の立場がガクンと落ちるのは、覚悟していた。（一万円で終わるかも）
そして、当然その後は茨の道だった。
鶴巻から運転してきた当事者が、なぜ事故った途端トイレに籠ってしまったのか、解らない。
愛想を全開にして、きびきび動作も切れる八二才（バカに見かけは若い）の代理人は、私の家に近い葛葉台の人。私の家の前は彼の散歩コースだと言う。
「駐車場に車が二台あるお宅でしょ」
バス通りを挟んでお隣の彼のエリアは、住宅街として整い、各戸に一台づつ車が収まっている。田や畑の残るこちらのエリアでは、他に駐車場を借りたりして、一家で二，三台は普通に所有している。
私のことも見知っていた。彼の奥さんは私の夫がボランティアで教えていたパソコン教室の生徒だったそうだ。私の家は、庭造りに熱意を傾けていた友人が亡くなって以来無人となってしまった隣家と、二軒揃って草木に埋まったような家で、かえって目立つのかもしれない。
私の車の見積もりを取った工場は（高い）ので、その代理人の連発する（ご近所の誼で）修理屋をあっちでもないこっちでもないと、裏道ばかり廻らされた挙句、彼の旧知の工場に決まった。彼が何を好んで、何の為にそんなに奔走しているのか解らない。事故の当事者は電話しても出ない。彼のしつこい交渉の結果、私の車は部品の取り換えではなく、板金でなおす事に

したので、工費は半額になったが、工期は倍になった。車を預ける日すら先に延びた。
あれやこれや、何回も彼に呼び出され、二台で秦野を走り回った挙句、敵もさる者、彼は修理代金の宛先を私に廻していたのである。
修理工場に事前に請求書の行先を確認し、最悪の事態を回避する位の芸当は私にも出来た。

だらだら、半月以上続いた車問題に疲弊し？私は、経験のない、気管支炎だか肺炎？に罹ってしまった。七度台、八度台のゆるい熱が昨日も今日も明後日もガンとして六度台に下がらない。咳と鼻水が激しい。（風邪が治るのに一冬かかった人もいたっけ）食事だけは作り、食べるとまた布団へ。しかし、いつか、食べ物から味が消えていた。コロナ？　臭覚はある。
五月二五日、突然、夫と布団を並べる羽目になった。病院嫌いの私と真逆の夫は、翌日、即、病院へ。検査の結果、インフルエンザでもコロナでもなかった夫の手にはごっそり薬の束。薬に滅法弱い、本体の病気より薬でやられる質の夫の行く末は・・・。彼の熱は二日で下がったが、胃腸がおかしい、トイレに立つと、ふらっとめまいがすると言う。

枕を並べてはいるが、一応、最低限の生活は送れている。もっと深刻な事態に陥った場合は、どこに相談を持ち掛けたらいいんだろう、と想定問答が頭内をめぐる。
六月二日のコロナの予防注射は、通知が届いて即、延期した。しかし、六日には三泊四日の壱岐・対馬への旅行が決まっている。それまでに体力が回復するのか？元々おぼつかない、すぐ痛くなる足は旅行に耐えられるだろうか。
大型台風二号の予想進路、六日は出発地羽田に最接近だ！　船にも乗るし、海は時化るに決まっている。旅行は取り止め？ならいいな！　しかし、二号は上げなくてもいい速度をました。その上、逸れて、あれよ、どこかへ行ってしまった。

六月六日。最低限の着替え、杖、傘を小さなリュックに詰め、早朝七時、
「そんな体で、よく出かけられるね」と、不安げな夫に駅まで車で送られ、羽田に向かった。コロナ以来、滅多に小田急に乗ってない。羽田など大冒険気分。横浜での乗り換えは、ながぁい端から端までを歩く。夫のメモでは時間はたっぷりあるが、バスのステップを

上がるのにも不安を覚える私には無理と心得、トイレに入った。
蒲田乗り換えの京急は座れなかった。さらに、蒲田近くなって(羽田行は点検のため振替輸送してます)などとアナウンス。
(もう　出たとこ勝負しかない。腹を括ろう)
ところが、蒲田のホームでは、羽田行の電車は遅れてはいるものの、動いていた。おろおろしているのは、私ばかり。

兎にも角にも、ツアーの集合場所に早々に辿り着く。姉はまだ来ていない。
暫くすると、目先のチェックインカウンターに姉らしき端正な姿が。濃い紺のデニムのパンツスーツ。カットが効いている。姉はいつも、特に義兄がいた頃はおしゃれに気を配っていた。(素敵だなぁ)背丈もあり、美人の姉がずっとと誇らしかった。今日のつばの広い黒い帽子では全体的に暗すぎる。差し色もない。
姉と会うのはインド旅行以来だから、八年振りかぁ。電話で声は聞いてはいたけれど。
両親がいた頃からの家族合同旅行は別として、姉との最初の旅行はハワイだった。私にとってまだ二度目の海外で、小学生の息子と中学生の次女を引き連れ、マウイ島のコンドミニアムに五泊、オアフのコンドミニアムに五泊の、緊張感と不安ばかりの個人旅行だった。そこに、義兄を亡くして五年たつ姉が一緒に行きたいと参加。心強かった。
姉は、ボーイフレンドを従えて成田に現れた。彼は受験に来た中学生みたいにがちがちに緊張しっぱなし。少年の瞳で必死に姉を見送る彼とゲートで別れた途端、なぜか姉は戦闘モード突入。嫌なことばかり言う。以降、反対に継ぐ反対。否定に継ぐ否定。

マウイ島、さすが、アメリカの家具はでかかった。部屋もゆとりがある、なんてものじゃない。広い寝室。でかいリビングとキッチン。コンドミニアムだから、私が自炊した。私的には、子供達を遊ばせる旅行。ツアーの様には、目先は変わらない。それでも、姉がコンドのプールで親しくなった現地住在日本人の情報により、火山へ一日ツアーしたり、クルージングに出かけたり、ダイヤモンドヘッドへハイキングしたり、アラモアナセンターでランチしたりしたが、姉には気に食わぬ事ばかり。それでは、姉にプランさせると、日

帰り出来ぬツアーを持ってくる。
「私、お姉ちゃんをハワイに誘ってないよ。お姉ちゃんが行きたいって頼んだんだからね」と遂に言ってしまった。姉は自棄になり、
「明日、一人で帰るから、お金を精算して」
禁煙ルームなのにタバコを吸いだす始末。にじり寄って、何とか一緒の帰国を承諾させた。
成田で姉はボーイフレンドの出迎えを受け、帰って行った。

次に、私が姉を北欧旅行に誘う気を起こすまでには、二五年の歳月が必要だった。姉と旅行する事を息子に喋ると、彼は日頃の温厚をかなぐり捨てて
「何で町野（姉）なんかと行くんだ」と怒鳴る。
（ほんの子供だった息子も姉に怒っていたんだ。今でも忘れていないんだ）と胸を突かれた。
個人旅行ではなく、おまかせのツアーなら姉の不平・不満は私を逸れた方向に行くだろう。
しかし、矢は別方向から飛んできた。
例えば、ツアー中のおしゃべりで、私が姉を持ち上げるつもりで、高三の時の話
「父兄面談の時ね、母の都合がつかなくて姉が来たの。先生、綺麗な若い女性が来たって喜んじゃって」
姉はオホホと笑い
「母がね、私とても行けないから貴方行って来てって頼むのよ。何でも先生のことを馬とか呼んで呼び出しを掛けられたって言うのよ」と笑いを取る。
（誰が高三にもなって馬なんて呼ぶか？中一の時可愛がってくれた先生の渾名は馬だったけど）
等々、私をネタにしまくり。事実を基に笑われるなら、我慢のしようもあるが、身に覚えのないことばかりで笑いの標的にされる。一緒に笑いながらも、顔が強ばる。食事の時など何が姉から発射されるか、気が気でない、戦々恐々状態。
「私、テレビは（こころの時代）と（100 分で名著）とニュースしか視ないの」どうでもいいけど、どちらも私の知らない番組だ。しかし、姉を読書家と思ったことはない。姉の机で見かけたのは（山靴の音）と花田清輝の（日本抵抗文学）の二冊だけで、ビバークとかラッセルとかの登山用語を私は覚え、抵抗文学に太宰が入っているのが、面白かった。紀元節の話で、百年経ったら、紀元七百年はぬぬ百とか言われるかもしれん、などと書いている。

ノルウェーからは、船で国境を越える。乗船は出国、下船は入国となる。乗船時、予め船に預けたスーツケースにパスポートを入れたまま、出国に並んでしまったメンバーが出た。ツアーの一行は列から外された。
「きっとあの人よ」
姉は、よくテーブルで一緒になる、姉も向こう夫婦も親しげにしている。夫の方がいないと言う。
翌朝、下船イコール入国だ。スーツケース受け取りとパスポートチェックを待つ。なにしろ大きな船なので、時間がかかる。姉は椅子を立ってトイレに行った。帰って来た途端
「あっ　トイレにバッグ忘れた」戻るなり一言
「パスポートは、これには入ってないのよ。妙さん」
(じゃぁ何処に在るんだ。昨夜、バックでなく、身に付けた方がいいって忠告したら
「バッグはいっつも肌身離さずだから、大丈夫」って可愛らしく胸に抱いたじゃない)
帰国の飛行機、夜中?に水のコップが回って来たら姉の隣で終わってしまった。姉に
「お水頼んだから」
「妙さん。あのね、私がコーヒーが好きなの知ってるでしょ」(知りませんでした)
「じゃぁ、自分で頼めば良かったじゃない。コーヒー位言えるでしょ」私は、怒って切り返した。
旅行中、姉の小間使いを散々やってきた。姉の入、出国カードも私が書いた。それで、一言も言わなかったけど、姉が年齢のさばをよんで、散々話を作って喋っているのも知った。そんなこんなに耐え続けて居ると、些細な事でいきなり爆発してしまう。
結果、姉の中で、私は『帰りのフライトで怒る人』になり、何年後かのインド旅行の帰りには、飛行機が空いていたこともあり、姉は早々に何処かの席に移ってしまった。
結婚前、姉は面倒見が良く、学友との遊びにも私を連れ歩いてくれた。正義感が強く、曲がったことが嫌いだった。学生の時、人の不正を目撃したと、泣いて母を困らせたこともあった。
しかし、結婚後姉に変化が。何か技巧的な率直でない、持って回った言いをする。姉は嘘をつく人と最初に認識したのは、義兄の死後何年もして
「彼はほとんどお金を残さなかったのよ」
ささやかなアパートが二軒あるとはいえ、義兄の年金

と、姉の、お車代程度の家庭裁判所調停委員の収入で、息子三人を医者に育て上げるのは無理だろう。まして長男は私学。次男は一浪して千葉大、三男は北海道までに大学を三校代わっている。
義兄は姉が屑籠に捨てたネクタイを、拾い上げ
「白衣からはちょっとしか見えないから」
古本屋への寄り道が唯一の趣味の人。
義兄は六十過ぎ姉が五十の時、白血病で逝った。

八年振りに会った姉は、帽子を取ると、驚いた。いきなり白髪頭。おまけに、あちこちに昔染めたブラウン系が褪せたまま残っている。それを無造作にゴムで・・・まるでやまんば。八十過ぎると三倍速で老けると、電話で嘆いていたが・・・顔も皺が刻まれている。姉はもともと細い。結婚以来ますます痩せた。ところが、北欧旅行の姉はややふくよかになっていた。ここに来て、逆戻りに痩せたので皺が置き土産になったのだろう。
しかし、蓬髪と皺以外は元気印。今はグランドゴルフ三昧。相変わらず体に切れがあり、眼も目端も利く。私はツアーのどん尻を何とか付いて、よろへろだが姉は真ん中辺を歩いている。

一泊目の壱岐の国民宿舎。売店にもレストランにも浴場にも便利な部屋を当てられた。
「私が一番年取ってるから、この部屋なのよ」と姉。
「そんなことないよ、バスの席は後ろから二番目だったじゃない。バスこそ考慮されるよ」
「でも、私が一番年長みたい」
「大体似たような年恰好だよ」
大体このツアーは、三万何がしの補助金漬け。その上、六千円のお買物券が付いた。普段、お土産の類は買わないが、送料・ホテルの飲み物まで券で賄えると言うので、バッチリ使い切り、自宅に送った。
平成天皇が非常に若い皇太子時代に、この国民宿舎に美智子さんと泊まられた。碑もその際の食器など展示物もある。さもありなんの夕食だった。姉は社交力全開。惚れ惚れするような笑顔だった。その上、姉は優しかった。物笑いの種にしないし、私をダシにして愛情深い姉を演じたりもしない。
夜は延々と喋り止まらない。止まったなと思うと、もう寝息。実に効率的。不器用な私はぴら眼で取り残された。
兄弟姉妹で八歳違うと、見て来た家族の風景が異なる。若い時代の両親のこと。二つ上の兄のこと。親戚

関係の経験は私より段違いに豊富だ。私が一度も会ったことのない、妻子ある絵描きと出奔した母の姉が、時々母を訪ねてきて、姉は素敵な生地をプレゼントされたと言う。戦後の物のない時代に、何処で手に入れたのか。自分でも絵を描く人だった。等々、初めて聞く話ばかり。生真面目な母はその人を嫌っていた記憶しか、私にはないが。池袋という便利なところに住まい、一人身でもあり広くて濃厚な親戚情報を持っている。義兄の親戚とも蝶々なんなんだった話は眉唾だろう。義兄の葬儀には、兄弟姉妹は出席せず、姪一人が参列しただけ。夫が親戚を代表して、姉に渡された原稿に従って喋った。

結局、三泊の旅行で姉が延々と語ったのは、息子達に大事にされている、自分の人生の総括、夢や希望や眉唾を含めて、いい人生だったと、結論付けたかったようだ。

コロナの前、次の旅行の話が電話で出た際、姉は財産の整理中で、時間の余裕がなかった。義兄名義の家作が一つそのままになっていて、処分したい。そこに夫の彼女が住んでいるらしい。

義兄にはずっと彼女が一人いて、自分名義の家作に住まわせていたらしい。そう言えば

「妙ちゃん　うちはフリーセックスなの。両方とも自由なの」と、てらてら顔を光らせたことがあった。変な事を言うなぁ、姉を見た。まだ、息子達も小学生の頃だった。

白血病で、三年以上義兄が入院と退院を繰り返していた間、面会可能期間に、家族達は病院に行っていたが、姉は決して行かなかった。義兄は

「家のことは純さん（姉）が専念する。病気のことは僕が専念するの」

しかし、私が看取りに行った時、もう意識のない義兄の枕元に、地味で実務的な印象の二人が座っていた。義兄の病院の看護師だった。その時は（そんなこともあるのか）だったが。今思えばその内の一人は・・・

兄が存命で姉の逃げ場を作れたら、実際に姉は長男を連れて逃げようとしたこともあったらしい。義兄も無理な生活はしなかったかもしれない。実際、振り返れば義兄の二重生活は悲壮なものがあった。私の両親には本気で尽くし切っていると感嘆していたのだが。

今回は安旅行のせいか、福岡から羽田へのフライトの待ち時間が四時間！大部分を飛行機の発着の見える

エリアで過ごした。私は本を読んでいたが、姉は時には、二分も空けぬ発着に夢中になっていた。確かに、各航空機の待機エリア、着機の移動まで全てが見渡せるデッキだった。風向きが変われば、発着の方向も変わる。機体も千変万化。

姉が食後も搭乗までゆっくり出来るレストランで食事したいと言うので、食堂街にトイレも兼ねて偵察に行く。まず、ドトールがあった。ここならゆっくりだ。ラーメン街は行列が出来ている店も。パスタは値頃店が二つ。

戻ると姉はまだ飛行機に夢中。スマホ片手の四〇代の女性と夢中で話し込んでいる。彼女はここで友人と待ち合わせ。そして飛行機マニア。アプリで検索しては、あの飛行機はどこの社の飛行機でどこ行き、何時発。と、二人嬉しそう。

レストランに行くと姉が指定していた六時を過ぎた。七時近くなっても、

「あの黒い飛行機が出発するのを見送ったら」

などと動かない。七時過ぎた。

シャッターを下ろす店も出て来た。

始めに案内したドトールは、すでに朝のコーヒーを二杯飲んだから嫌だと言う。

「私、コーヒーは朝の一杯だけと決めているの」

（昨日も一昨日も朝と夜、二杯づつ飲んでたじゃないか）

「博多に来たんだから、博多ラーメン食べたい」

しかし、ラーメン屋はもう閉まっていたり、行列だったり。雰囲気が姉の気に食わなかったり。

「妙さん、パスタが食べたかったよね」

ショーケースのパスタをあれこれ選んでいると、

「ドトールでゆっくりしよう」

スーツケースを引いて戻って行く。ドトールに着いたら、そこからまた一回りさせるつもりだ。

私は叫ぶ。

「お姉ちゃん、そんなこと続けてると、食べはぐれるよ。搭乗までぎりぎりなんだから」

スーツケースを引いてゆっくり戻って来る姉を見ながら

（エッ、これって、子供達が小さい時、私がお出掛けの度に、夫に駄々こねたことだよなぁ）

不意のデジャヴが私に降った。